

母親による子どもの自立の受容に関する研究：父親の家族との関わり方をめぐって

藤松, 裕子
九州大学大学院人間環境学府

野島, 一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/866>

出版情報：九州大学心理学研究. 3, pp.59-68, 2002-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

母親による子どもの自立の受容に関する研究

—父親の家族との関わり方をめぐって—

藤松 裕子 九州大学大学院人間環境学府
野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

The study on the mother's acceptance of her child's independence — Focusing on the father's relationship with his family—

Hiroko Fujimatsu (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Kazuhiko Nojima (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

The general purpose of this study is to clarify how the mother with an adolescent child accepts independence of her child. More specific purposes are as follows: (1) what kind of effect does the father's relationship with his family have on the mother's acceptance of her child's independence? (2) what kind of feelings does the accepting mother and the less accepting mother have respectively regarding the independence of her child? (3) what kind of relationships are there between the mother's feelings toward her child and the father's relationship with his family? Main results are as follows: (1) more accepting mothers for independence of their children recognized more emotional interactions between the child and the father. (2) more accepting mothers for independence of their children trusted the growth of their children, and less accepting mothers felt loneliness toward the growth of their children. (3) when the emotional interactions between the father and the family was higher, the mother's self-involvement to her individual role was higher and her sense of loneliness toward the growth of her child was lower. Furthermore, the more the father spends time with his family, cooperates with his wife, and has direct interactions with his child, the less sense of loneliness the mother has toward the growth of her child.

Keywords: the mother's acceptance of her child's independence, the father's relationship with his family, adolescence

問題と目的

近年の少子高齢化の流れは、女性の生き方に多大な影響を及ぼしている。少子化は、育児期間の短縮化と、親にとっての子離れの早期化をもたらし、人生80年という長寿社会の出現は、子どもが自立した後の残りの人生の長期化をもたらす。つまりこれらの現象により、女性にとって、大人になった子どもあるいは残りの人生を共に過ごしていくことになる夫とのつきあい方、そして残された自分自身の人生について考えていくことの重要性が増していることが指摘され得るのである。

しかしながら、これまでの母親あるいは母子関係を扱った研究を振り返ると、その多くは子どもを対象としており、たとえ母親を対象としていても、あくまでも「子どもにとっての環境要因としての母親」という視点からの研究であることが多かった。「母親にとっての子ども」という視点が、必要性は指摘されながらも長い間考慮されていなかったのである（柏木, 1995; 大日向, 1988）。最近になってようやく、親としての発達や育児不安など、親そのものについての研究が増え始めている（沼山, 2000）。とはいえ、それでもやはり幼児を持つ母親についての研究が大半であり、青年期以上の子どもを持つ母親についての研究は不十分である。また近年、生

涯発達の視点の浸透により、高齢者を対象とした研究も増加しているものの、柏木（1995）によれば、「子ども、青年期の時期から一気に高齢期に飛び越えてしまい、その間の成人期については依然として研究、関心は希薄である」という。青年期以上の子どもを持つ親に関する研究の少なさに加え、成人期そのものに関する研究も依然として不十分なのである。

自分の子どもが成長し、自立していくという経験は、ほとんどの親が一般的に味わうものであろう。さらには先に挙げた少子高齢化の進展という現象を鑑みるならば、青年期の子どもを持つ親、とりわけ育児への関与が相対的に大きいと思われる母親が青年期の子どもの自立をどのように受け止め、その後の人生へ向けてどのような一歩を踏み出していくのかという点について考えることは非常に重要であるといえる。そこで本研究では、母親にとって青年期の子どもがどのような存在なのか、子どもの自立を母親はどのように受容していくのかということを明らかにするための手掛かりを得ることを目指したい。なお本研究では、青年期の子どもとは大学生である子どもを指すこととする。というのも、子どもが高校を卒業するまでは、進路決定の際などに見られるように、親が親としての役割を果たす場面が多いと考えられるためである。ただし、経済的自立をしているか否かに

については、「子どもの自立」という概念の定義に大きく影響してくると思われるため、今回は焦点を当てないこととする。

自立期の子どもを持つ母親の多くは中年期の段階に達していると言える。岡本(1994)は中年期女性におけるアイデンティティの発達に関する研究を行う中で、中年期女性にとって、子どもの自立は自分の人生を見つめなおすきっかけになり、それによってアイデンティティの危機がもたらされることが多いことを見出している。また、笹田(1996)によれば、「色々な不安や葛藤を抱きながらも母親役割を取ってきた女性も子どもが成長し、経済的にも精神的にも自立していくことをきっかけに、母親役割の軽減や変容を余儀なくされる。そして、この体験から引き起こされる喪失感や寂しさが中年期女性の心理的問題として多く語られてきた」という。このような中年期の母親の心理は「空の巣症候群(empty nest syndrome)」という言葉と共に論じられることが多い。「空の巣」におかれること、すなわち子どもの自立に直面することは、母親にとって大きな心理的危機をもたらす可能性があるのである。そして、こういった子どもの自立に伴う喪失感を上手く乗り越えること、つまり子どもの自立を受容するということが、この時期の母親が取り組むべき大きな課題となるのである。

それでは、子どもの自立を受容するとは、具体的にはどういうことを指すのであろうか。鈴木(1998)は、「子離れ」概念の定義において、「『関係性』を基盤としながら、親が子どもの自主性を尊重して、子どもから離れること・子どもと距離を置くこと」、「親自身が主体性を持つこと」の2点を挙げている。つまり、子どもの自立を受容するということは、子どもの自主性を尊重し、子どもを信頼する姿勢を持つと共に、母親自身も主体性を持つことで、親子の関係性の変化を受け入れていくことだといえるのではないだろうか。

「空の巣症候群」の例にも見られる通り、子どもの自立の受容という問題は決して容易ではなく、母親の人生そのものの見つけ直しにもつながり得る問題である。しかしながらその一方で、全ての母親が「空の巣」状況に苦しむとは限らないという指摘もあることは事実である(無藤ら, 1995)。子どもの巣立ちを容易に克服できる母親や、今まで子どもに手をかけていたぶん今後は自分の好きなことができる喜びも存在するだろう。子どもの自立と、それに伴う母親役割の変容に対する受け止め方も多様であるといえるのかもしれない。では、このような相違が生じるのはなぜなのだろうか。母親による子どもの自立の受容という問題には、様々な要因が関わっていると筆者は考える。たとえば、母親本人のパーソナリティ、育児以外に母親が専念することのできる職業や趣味の有無、過去における自分自身の親との関係、

これまでの子どもとの関係などが挙げられる。しかしここで筆者が焦点を当てたいのは、父親の存在である。父親の存在に焦点を当てた研究としては、幼児を持つ母親の育児不安について、父親の協力が必要であることを見出した研究などが増えつつある(大日向, 1988; 柏木, 1993)。しかしながら、青年期の子どもを持つ母親にとっての父親の役割に焦点を当てた実証的研究はわずかしかない。友清(1996)は、母親による子どもの自立の受容について、子ども・夫への愛着の様相との関連を見ることで検討を行っている。結果、子どもの自立に受容的な母親は子どもよりも夫に対してより強い愛着を向けていることなどを見出しており、母親が子どもの自立を受容していくには父親の支えが必要なのではないかという示唆的な考察を行っている。そこで筆者は、友清の研究結果を参考に、母親による子どもの自立の受容という問題を、特に父親という第三者の存在に焦点を当てて考えてみたい。というのも、友清の結果からもわかるように、子どもの自立の受容とは、現実問題として、決して母子の二者間のみ問題ではなく、父親という第三者も含めた三者関係の中で見ていかねばならない問題であると思われるためである。

青年期の子どもを持つ母親にとって、子どもの自立を受け入れることと同時に、大きな課題となり得るのが、夫婦関係の再構築である。これら二つの課題は互いに深く関わり合いながら進行するとも言える。実際、岡堂(1995)は、「夫婦間での愛情交換の親密度が国際比較において相対的に低い」日本においては、親子関係によって人間的愛情関係が満たされていることが多く、「子離れ」は親に心理的な危機をもたらすということを指摘している。つまり、子どもの自立の受容に関わる要因には先述した通り様々なものが挙げられるが、母親が「空の巣」の状況にどのような寂しさを抱くのか、あるいは子どもの自立をいかにスムーズに受容できるのかという問題には、父親が母親である自分や家族に対してこれまでどのような関わりを持ってきたのかという点も大きく影響しているといえるのではないだろうか。もし母親が、これまでの父親の家族への関わりを充実したものであったと捉えられるならば、子どもの自立に伴う夫婦関係の見直しもスムーズに行うことができ、子どもの自立を夫婦二人で後押しすることができるであろう。また、たとえ母親が子どもの自立に深い喪失感を抱いていても、その悲しみから立ち直っていく努力を支えるような、夫の理解と支援があれば、母親は喪失の悲しみからやがて回復し、新たな親子関係・夫婦関係の再構築へ歩み出すことができるのではないだろうか。

以上のことから、本研究の目的を以下にまとめる。
目的①:母親による子どもの自立の受容に対して、父親の家族とのどのような関わりが、どのような影響を持つ

のかについて明らかにすると共に、子どもの自立に受容的な母親が、父親の家族との関わりをどのように捉えているのかについて明らかにする。目的②：そして、大学生の子どもを持つ母親が子どもに対して日頃どのような感情を抱きながら接しているのかについての検討も加え、自立の受容という問題についてより感情面に焦点を当てた検討を行う。目的③：さらに、大学生の子どもに対して母親が抱いている感情と、父親の家族との関わりとの間にはどのような関係があるのかということ明らかにする。

方 法

1. 調査対象 F県内の大学に通う学生の母親230名。
2. 調査期間 2000年11月下旬～12月上旬。
3. 手 続 き 予備調査として実施した、大学生の子どもを持つ母親19名に対する半構造化面接と自由記述による質問紙調査の結果、及び関連文献などを参考に質問項目を検討・作成した。その後、臨床心理学専攻の大学院生3名に臨床家判定を依頼し、各質問項目の内容妥当性を検討した。質問紙作成後、大学の講義の際に、受講学生を通じて母親に調査協力を依頼した。質問紙は、自宅生には母親に直接手渡してもらい、自宅外生については郵送による調査を行った。
4. 質 問 紙 以下の構成からなる質問紙調査を実施した。

(1) フェイスシート

調査対象である母親の年齢、学歴、就業形態や子どもの人数、年齢等を把握するため、フェイスシートへの記入を求めた。

(2) 父親の家族との関わりを測る質問項目

予備調査と、永田(1999)による「良好な夫婦システム尺度」、尾形・宮下(1999)による「父親の家庭での協力を尋ねる質問項目」を参考に、父親の家族との関わりを測るための質問項目を作成した。永田(1999)の「良好な夫婦システム尺度」とは、凝集性(夫婦間の情緒的な結びつき)と適応性(夫婦がシステムでおきた問題や危機に対処できる能力)の2つの次元により構成された、夫婦システムの良好性を測るための尺度である。一方、尾形・宮下(1999)の「父親の家庭での協力を尋ねる尺度」とは、「父親の家事への援助」、「夫婦間のコミュニケーション」、「子どもとの交流」の3つの下位尺度により構成された尺度である。これら2つの尺度をもとに、父親による母親と子どもに対する関わりについての母親の認知を捉えるための「父親の家族との関わりを測る質問項目」を作成した。なお評定は、「当てはまる～全く当てはまらない」の4段階で回答を求めた。

(3) 母親感情を測る質問項目

予備調査と、谷井・上地(1993)による「親役割診断尺度」、大日向(1988)による「母親感情を測定する尺度」を参考に、大学生の子どもを持つ母親が子どもに対して日頃抱いている感情内容について調べるための質問項目を作成した。谷井・上地(1993)の「親役割診断尺度」とは「干渉」、「受容」、「分離不安」、「自立促進」、「適応援助」及び「自信」の6つの下位尺度により構成されており、中学・高校生の子どもの持つ親の、自分の親役割行動の捉え方について総合的に調べるための尺度である。一方、大日向(1988)の「母親感情を測定する尺度」とは、「子どもへの献身と密着」、「子どもの人格の独立性の意識」、「子どもの成長に対する寂しさ」の3つの下位尺度により構成され、母親が自分の子どもに日頃向けている感情内容について調べるための尺度である。本研究では、これら2つの尺度を参考に、調査対象が自立の時期を迎えた大学生の子どもをもつ母親であるということ考慮した上で、母親が大学生の子どもに対して日頃抱いている感情について調べるための質問項目を作成した。なお評定は、「当てはまる～全く当てはまらない」の4段階で回答を求めた。

(4) 母親による子どもの自立の受容度を測る質問項目

友清(1994)が作成した「母親による子どもの自立の受容度を測るための質問項目」を用いた。友清のこの質問項目は、母親にとって自立の受容が普段は意識しにくいものであるという友清自身による予備調査の結果に基づき、母親と子どもとの間で意見が対立した際に母親がどのような態度を取るかという、よりイメージしやすい行動面に着目して尋ねる質問項目である。なお、なお評定は、「当てはまる～全く当てはまらない」の4段階で回答を求めた。

結果と考察

1. 調査対象についての基本データ

F県内の大学に通う大学生の母親230名に協力を依頼し、150名から回答が回収(回収率65.2%)された。有効回答数は133(57.8%)であった。調査対象(大学生の子どもを持つ母親)の平均年齢は49.3歳であった。Table 1に大学生の子どもの年齢、性別、同居あるいは別居についての人数を示した。

Table 1 大学生の子どもに関する基本データ

平均年齢		21.04		
標準偏差		1.19		
性別	男性(人)	51	同居(人)	43
	女性(人)	82	別居(人)	90
	計	133	計	133

Table 2 「父親の家族との関わりの程度を測る尺度」の因子負荷量(プロマックス回転後)

項目番号及び項目内容	因子負荷量			共通性 α 係数
	F 1	F 2	F 3	
7. 夫は、どんな時でも私に思いやりといたわりを示してくれる。	.859	.003	-.001	.733
15. 夫は、私の生き方を尊重してくれる。	.808	-.155	.084	.573
18. 私たち夫婦は、何かを決めるときには、お互いの意見を尊重する。	.779	.073	.108	.640
6. 私たち夫婦は、お互いに親密で信頼しあっている。	.756	.165	-.035	.741
28. 私は、夫との関係に満足している。	.724	.094	.091	.738
21. 私は、夫との関係で自分ばかりが我慢していると感じている。	.718	-.100	-.043	.388
8. 夫は、子どもに対して、細かいことには口出しせず、ある程度の距離を置いて見守ってきた。	.713	-.141	-.190	.276
5. 私は、夫の愛情を十分感じることができる。	.695	.135	-.051	.687
9. 私は、夫の稼ぎに満足している。	.578	-.039	.073	.358
17. 私は、夫の支えであろうとしている。	.553	.308	-.212	.459
19. 夫は、人間的な魅力を持ち、周囲の人から尊敬され、慕われている。	.528	-.103	.253	.415
24. 私は、子どもが家を離れた後の夫婦二人きりの生活に対して不安を感じる。	.506	.109	.033	.375
13. 私は、夫と一緒にいると楽しい。	.486	.353	.057	.676
32. 夫と子どもの関係はよい。	.452	.055	.294	.524
2. 私たち夫婦は、お互いに助け合う。	.406	.318	.147	.614
30. 夫は、子どもが自分で決めた進路を尊重してきた。	.406	.143	-.048	.238
3. 夫は、家族を大事にしてくれる。	.403	.157	.270	.547
29. 私たち夫婦は、趣味や関心のあることを一緒に楽しむ。	.007	.925	-.182	.684
11. 夫は、家族と一緒に過ごす時間を最優先してくれる。	.012	.844	-.064	.634
10. 私たちは、夫婦で一緒にいろいろなことをするのが好きである。	.155	.777	-.105	.692
25. 私たち夫婦は、二人で協力・分担して育児を行ってきた。	-.339	.756	.293	.549
26. 夫は、夫婦で過ごす時間を大切にしてくれる。	.171	.715	.008	.729
14. 私たち夫婦は、二人で協力・分担して家事を行ってきた。	-.106	.653	.029	.358
31. 私たち夫婦は、二人で老後のことについて話す。	.144	.427	.197	.475
23. 夫はこれまで、子どもに人生や社会のことを教えてきた。	.091	-.150	.977	.705
12. 夫は、今でも子どもといろいろと話す。	-.193	.290	.789	.753
27. 夫はこれまで、子どもに自分の仕事の内容を教えてきた。	.016	-.490	.652	.400
16. 夫はこれまで、子どもが勉強や進路のことで悩んでいるときの相談相手になってきた。	.118	.091	.632	.607
20. 夫はこれまで、いざというときには前面に出て子どもを叱ってきた。	.128	-.098	.629	.430
固有値	11.94	10.63	8.96	
寄与率 (%)	41.16	36.67	30.90	
累積寄与率 (%)	45.61	50.65	55.19	

2. 各質問項目の構造化

(1) 「父親の家族との関わりの程度を測る質問項目」の因子分析

各項目の回答について、「当てはまる－4点～全く当てはまらない－1点」のように得点を与え、その際、逆転項目の処理も行った。各項目のうち、天井効果が生じた質問項目1つを除外した。

因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った結果, 3因子解を適当と判断した。プロマックス回転後, 因子負荷量が.40以下のもの, また各因子間で負荷量に差のない項目を除外して, 再度同じ方法を用いて分析にかけた。最終的に分析した項目数は29項目となった。各項目の因子負荷量をTable 2に示した。

因子負荷量が.40以上を示した項目の内容について各因

子を解釈した。まず, 因子1は夫の自分に対する情緒的サポートや, 夫婦間の情緒的な交流, また, 父親としての子どもの対する情緒的関わりについての項目の負荷が高かった。従って, 因子1は, 「家族との情緒的交流」因子と命名した。次に, 因子2に対して高い負荷を示したのは, 父親が家族と一緒にどのように過ごしているのか, あるいはどのように協力し合っているのかということに関する項目であった。従って, 因子2は「時間の共有と協力」因子と命名した。そして次に, 因子3に対して高い負荷を示したのは, 父親が子どもと話したり, 何かを教えたりするといった, 父親と子どもとの直接的な交流に関する項目であった。従って, 因子3は「子どもとの直接的交流」因子と命名した。

因子分析の結果に基づいて, 3つの下位尺度得点を算

Table 3 「母親感情を測る尺度」の因子負荷量(プロマックス回転後)

項目番号及び項目内容	因子負荷量						共通性	α係数
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6		
5. 人生で出会う困難を子どもは自分の力で十分克服していけると思う。	.863	-.083	.011	.112	.062	-.151	.795	
30. 子どもは自分にとって大事なことを自分で決定できると思う。	.768	.065	.036	-.180	-.042	.204	.617	
24. 子どもは親に頼らず生きていけるくらい精神的に成長していると思う。	.762	.067	-.027	-.027	.017	.024	.577	
12. 子どもはやりたい道を自分で切り開く力を持っていると思う。	.726	.025	.014	.043	-.041	-.047	.597	
27. 親の期待や思惑にとらわれず、のびのびとした人生を子どもに送らせたい。	.422	.062	-.027	.009	.031	.095	.204	.833
1. 私は、親であることに生きがいを感じる。	-.100	.688	.266	.112	.101	.001	.539	
7. 子どもを見ていて、お腹を痛めた自分の子だという感慨がわいてくる。	.039	.649	-.088	-.008	-.023	.003	.446	
13. 私は、子どもと一緒にいるときが一番幸せである。	.088	.627	-.151	.078	.086	-.125	.508	
18. 私は、子どもと話をするのが好きである。	.144	.429	-.087	.177	-.112	-.009	.337	
9. 子どもの将来がいつも気にかかる。	-.113	.400	-.273	-.211	-.194	.241	.347	
2. 私は、自分が子供にとって望ましい母親であるかどうか考えることがある。	.099	.393	.061	-.094	.062	.156	.201	.686
6. 私には打ちこんでいるものがある。	.033	.076	.797	-.136	.028	-.143	.611	
17. 何かしたいと思っても、どうしてもこれをしたいというものが無い。	-.039	.133	.737	-.101	-.155	-.033	.603	
14. 私は、私の好きなことをする時間を持っている。	.017	-.009	.505	.029	-.039	.016	.287	
8. 子どもに手がかからなくなったので、これからは私の人生だと思う。	-.013	.002	.486	.248	.205	.217	.359	.717
4. 子どもが日頃何を考えているかは大体分かっている。	-.102	.065	-.053	.857	-.009	-.037	.687	
11. 子どもの成長に伴い接触時間は少なくなったが、子どものことを理解できている。	.007	-.049	.022	.674	-.179	-.002	.541	
28. 子どもと意見が異なるときはお互いが納得いくまで話し合う。	.167	.177	-.043	.546	-.035	.050	.482	.766
3. いざ子どもに手がかからなくなると、手持ちぶさたで心の中にはぽっかり穴があいたようである。	-.088	.201	-.196	.035	.571	-.072	.515	
10. 私は、自分が一人ぼっちだと思うことが多い。	.119	.054	-.011	-.179	.554	-.186	.350	
23. 最近親子の会話が少なくなって淋しい。	-.049	.041	.064	-.085	.542	-.019	.316	
22. 母親が子供のことを考えるほどには、子どもは母親のことを考えないものである。	.067	-.281	.007	.068	.457	.280	.368	.604
32. これからは一歩離れた所から子どもを見守りたい。	.057	.049	.106	.041	-.111	.672	.482	
21. 我が子といえども自分の思い通りにいかないことも多いものだと思う。	.040	-.011	-.222	-.073	-.056	.460	.253	.381
固有値	3.78	2.40	2.70	2.72	1.99	1.06		
寄与率 (%)	15.77	10.00	11.23	11.34	8.31	4.43		
累積寄与率 (%)	19.13	27.88	33.66	38.87	42.58	45.93		

出した。これらの下位尺度におけるクロンバックのα係数は.943～.856のレンジであり、十分な信頼性を示していると判断した。以上の結果により、「家族との情緒的交流」、「時間の共有と協力」、「子どもとの直接的交流」の3つの下位尺度からなる「父親の家族との関わりを測る尺度」(以下「父親の関わり尺度」とする)を確定し、以後の分析を行うことにした。

(2) 「母親感情を測る質問項目」の因子分析

各項目の回答について、「当てはまる-4点～全く当てはまらない-1点」のように得点を与え、その際、逆転項目の処理も行った。因子分析(主因子法、プロマックス

回転)を行った結果、6因子解を適当と判断した。プロマックス回転後、各因子間で負荷量に差のない項目と負荷量が.39以下のものを除外し、再度同じ方法を用いて分析にかけた。最終的に分析した項目数は29項目となった。各項目の因子負荷量をTable 3に示した。

因子負荷量が.39以上を示した項目の内容について各因子を解釈した。まず、因子1で高い負荷量を示した項目は、いずれも母親が自分の子どもの成長を信頼している傾向に関する項目であった。従って、因子1を「子どもの成長への信頼」因子と命名した。次に、因子2で高い負荷を示した項目は、母親としての自分を意識し、母親

Table 4 「子どもの自立の受容度を測る尺度」の因子負荷量

項目番号及び項目内容	因子負荷量	共通性
5. 子どもの買ってきた洋服が好感のもてないものだった場合、そのような服装はしないように言い聞かせる。	.630	.397
4. 男女交際について子どもと意見が異なった場合、親の意見に従わせようとは思わない。	.616	.379
6. 就職活動中の子どもが、親の目から見て良いと思う企業A社と、良いと思えないB社の両方から内定をもらったという。子どもが「B社なら私(僕)のやりたい仕事ができると思うから、B社に行く。」といった場合、A社に行くように説得する。(逆転項目)	.607	.368
10. 子どもの結婚については親の考えに従わせたいと思う。(逆転項目)	.595	.354
1. 子どもの友人に親から見ると好ましくない人物がいる場合、つき合いをやめるように言い聞かせる。(逆転項目)	.575	.330
7. 子どもがボランティアとして数年間海外に渡り困っている人の助けになりたいという(紛争に巻き込まれる恐れはない)。このような場合、反対しない。	.514	.265
8. ○○学部に通う子どもが△△学部を受験し直したいので今通っている大学を中退したいという。子どもが「よくよく考えた末にだした結論です。学費は自分で何とかするから。」というような場合、許さない。(逆転項目)	.418	.174
2. 子どもが就職活動用のスーツを買いに行くという。子どもは「もう大人なんだからスーツくらい自分で選べる。」という。このような場合、親がついて行って適切な判断をするべきだと思う。(逆転項目)	.414	.172
11. 子どもがどのようなことに、どれくらいお金を使っているのか親が監督してやる必要はないと思う。	.405	.164
(クロンバックの α 係数 .769)	固有値 寄与率 (%)	2.604 28.933

役割に自己投入している傾向に関する項目であった。従って、因子2を「母親役割への自己投入」因子と命名した。因子3で高い負荷を示した項目は、母親が一人の人間として、一個人としての自分を意識している傾向、すなわち個人役割に対して自己投入している傾向に関する項目であった。従って、因子3を「個人役割への自己投入」因子と命名した。因子4の各項目は、子どものことを理解し、子どもとのコミュニケーションを持とうとする傾向に関する項目であった。そこで、因子4は「子どもとのコミュニケーション」因子と命名した。因子5の各項目は、母親が子どもの成長に寂しさを抱き、疎外感を味わっている傾向に関する項目であった。従って、因子5を「子どもの成長への寂しさ」因子と命名した。因子6で抽出された2項目は、母親が子どもとの間に距離感を感じている傾向に関する項目であり、「子どもとの距離感」因子と命名した。

以上の結果に基づいて、6つの下位尺度得点を算出した。これらの下位尺度におけるクロンバックの α 係数は因子1～5までは.604～.833のレンジであり、中には若干低い数値も見受けられるが項目数から考えて因子1～5についての信頼性は低くないと判断した。ただし、因子6については α 係数が.381と極めて低く、信頼性が低

いと判断されたため、因子6については以後の統計を行わないこととした。以上の結果により、「子どもの成長への信頼」、「母親役割への自己投入」、「個人役割への自己投入」、「子どもとのコミュニケーション」、「子どもの成長への寂しさ」の5つの下位尺度からなる「母親感情を測る尺度」(以下「母親感情尺度」とする)を確定し、以後の分析を行うこととした。

(3)「子どもの自立の受容度を測る質問項目」の因子分析
各項目の回答について、「当てはまる-4点-全く当てはまらない-1点」のように得点を与え、その際、子どもの自立を受容する程度が高いほど得点が高くなるように逆転項目の処理を行い、得点を算出した。各項目のうち、天井効果が生じた1つの項目を因子分析に持ちこまなかった。因子分析(主因子法)を行った結果、因子の解釈から1因子解が最適解であると判断された。各項目の因子負荷量をTable 4に示した。

以上の結果に基づいて、負荷量が.35以上の9項目を自立受容尺度として採用した。さらにクロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .769$ という結果が得られ、信頼性は十分であると判断された。決定した9項目の合計得点(以下、自立受容度得点と呼ぶ)について、全調査対象の平均・標準偏差・最大値-最小値・4分位点をTable 5

Table 5 全対象者の自立受容度得点の平均・標準偏差・
最大値-最小値・四分位点

標準偏差		4.2
最小値-最大値		17-36
四分位点	25パーセンタイル点(L群)	24
	50パーセンタイル点	27
	75パーセンタイル点(H群)	30

に示した。また、自立受容尺度による分析を行う際には、自立受容度得点の25%点以下の群を自立受容度L群(以下L群とする)、75%点以上の群を自立受容度H群(以下H群とする)として群分けを行った。

3. 目的①の検討：父親の関わり尺度得点と自立受容度得点との関連について

子どもの自立をより受容しているかそうでないかによって、父親の家族との関わりについての母親の捉え方がどのように異なるのかを明らかにするため、父親の関わり尺度の各下位尺度について、自立受容度L群とH群の得点を比較するt検定(両側)を行った。その結果、「家族との情緒的交流」得点においてH群がL群より有意に高かった($t(72)=2.03, p<.05$) (Figure 1)。「家族との情緒的交流」では、とりわけ父親と母親との情緒的な関係性についての項目が中心的なものであった。上の結果より、父親が家族に対して、とりわけ母親本人に対してより積極的に情緒的な関わりを持ってくれていると母親が感じることが、母親による子どもの自立の受容を促し得るということが分かった。他の下位尺度である「時間の共有と協力」、「子どもとの直接的交流」については自立受容度との有意な関係は見られなかった。母親が子どもの自立を受容していく上では、父親が家族に対する具体的な行為として何を行ったかということよりも、父親が家族への情緒的な面でのサポートを与えていることが何より重要であるということが示唆された。

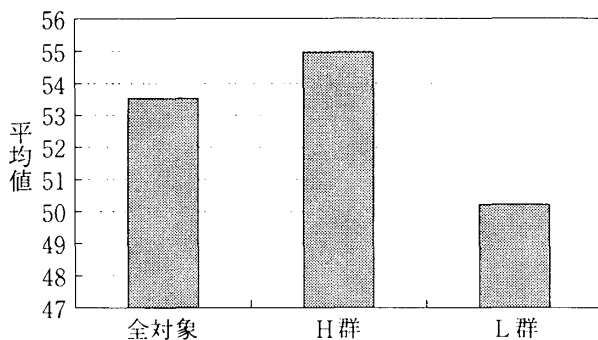


Figure 1 群別の「家族との情緒的交流」得点

4. 目的②の検討：母親感情尺度得点と自立受容度得点との関連について

子どもの自立をより受容しているかそうでないかによって、母親が大学生の子どもに対して抱く感情がどのように異なるのかを明らかにするため、母親感情尺度の各下位尺度について、自立受容度L群とH群の得点を比較するt検定(両側)を行った。その結果、「子どもの成長への信頼」得点においてH群がL群より有意に高かった($t(73)=3.69, p<.01$) (Figure 2)。また、「子どもの成長への寂しさ」得点においてL群がH群より有意に高かった($t(74)=2.78, p<.01$) (Figure 3)。

「子どもの成長への信頼」は、母親が、子どもは自分の力で生きていくことができるほどに成長していると感じ、子どもを信頼している傾向についての下位尺度であった。子どもの自立の受容に関わる要因の一つには、子ども自身の成長を母親がどのように感じているかということも挙げられるだろう。母親から見て子どもが頼りない様子であれば、母親が自立を受容しているかどうかという以前に、子どもが心配でつい口を出したくなってしまふかもしれない。子どもの自立の受容は、母親自身の内面ばかりの問題ではなく、現実的に子どもが成長しているように感じられるかどうかという点も大きく関わっているということが示唆された。

逆に、「子どもの成長への寂しさ」についての結果か

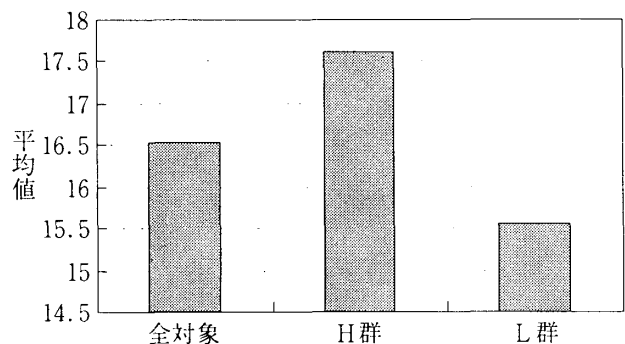


Figure 2 群別の「子どもの成長への信頼」得点

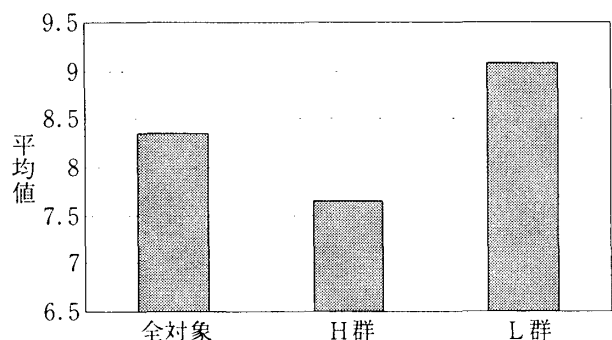


Figure 3 群別の「子どもの成長への寂しさ」得点

Table 6 「父親の関わり尺度」と「母親感情尺度」の下位尺度間のピアソンの相関係数

父親の家族との関わり	母親感情	子どもの成長への信頼	母親役割への自己投入	個人役割への自己投入	子どもとのコミュニケーション	子どもの成長への寂しさ
家族との情緒的交流		.159	-.132	.228**	.074	-.270**
時間の共有と協力		.157	-.003	.156	.117	-.191*
子どもとの直接的交流		.120	-.042	.138	.093	-.253**

**1%水準で有意(両側) *5%水準で有意(両側)

ら、子どもの自立をより受容できていない母親は、子どもが自分から離れていくことに対してより強い寂しさを感じていることが示唆された。母親の感じる強い寂しさや孤独感が、自立の受容を妨げ、結果として母子双方の「子離れ・親離れ」に支障をもたらす可能性もあるだろう。

他の下位尺度である「母親役割への自己投入」、「個人役割への自己投入」、「子どもとのコミュニケーション」については、自立受容度との有意な関係は見られなかった。母親が、母親役割や個人役割などいずれの役割に重きを置いているにせよ、あるいは子どもとのコミュニケーションをどのように捉えているにせよ、子どもの自立の受容においては有意な影響は及ぼさないということが示唆された。

5. 目的③の検討：父親の関わり尺度得点と母親感情尺度得点との関連について

父親の関わり尺度と母親感情尺度における各下位尺度間のピアソンの積率相関を算出した結果、わずかではあるがいくつかの下位尺度間に相関が見られた(Table 6)。

分析の結果、父親の関わり尺度の「家族との情緒的交流」において、母親感情尺度の「個人役割への自己投入」との間に弱い正の相関がみられた($r = .228$, $p < .01$)。これら2つの下位尺度項目は、一見したところ関連性が低いように思われるのだが、わずかながらでも相関が見られたのは非常に興味深いことであった。本研究においては、母親による子どもの自立の受容において、父親の家族との関わりがどのような影響を持つのかという点に主に焦点を当てた調査を行った。しかし、上の結果から、父親の家族との関わりは、母親による子どもの自立の受容ばかりでなく、母親の一人の人間としての生きがい感にも影響を及ぼすのではないかとということが示唆された。つまり、父親の情緒的サポートがあることで、母親は自分自身と向き合い、自分の趣味や関心に積極的に取り組むことができるといえるのではないだろうか。岡本(1994)は、アイデンティティ研究の中で、女性は個の確立によってアイデンティティを成熟、深化させていくという側面と同時に、「他者との関係性」によってアイデンティティを確認し、成熟させていく側面が強いのではないかと論じている。分析の結果から得ら

れた、父親との間に充実した情緒的交流を持つ中で母親自身も自分自身と向き合うことができるという示唆は、岡本のこの指摘に通じていると思われる。

また、相関分析の結果、父親の関わり尺度の「家族との情緒的交流」と母親感情尺度の「子どもの成長への寂しさ」との間に弱い負の相関が得られた($r = -.270$, $p < .01$)が、これは、子どもが成長して自分の手を離れていこうとしていても、父親の情緒的な関わりが活発であれば母親は寂しさや孤独感を感じるということが少ないということを示唆していると考えられる。先述した父親の関わり尺度と母親感情尺度についての各分析の際に見られたように、「家族との情緒的交流」と「子どもの成長への寂しさ」がそれぞれ共に自立受容度と関係していたことから考えると、子どもの自立に直面した母親を父親が情緒的に支えることにより、母親は寂しさや孤独感を感じることなく、子どもの自立をよりスムーズに受け入れることができるといえるのではないだろうか。

さらに、相関分析では、父親の関わり尺度の「時間の共有と協力」と母親感情尺度の「子どもの成長への寂しさ」との間に弱い負の相関が得られた($r = -.191$, $p < .05$)。この結果についても先述した「家族との情緒的交流」に関する結果と同様、父親が母親と共に過ごす時間を大切に、育児や家事を分担・協力してくれる(あるいはこれまでそうであった)と感じることが母親の寂しさを少なくするということが示唆された。母親にとっては、父親との情緒的な交流ばかりではなく、父親が実際に母親をはじめとする家族と共に過ごし、家庭内での様々な仕事について分担・協力してくれること、つまり家族に対して実際に「手」を使って積極的に関わってくれることも、子どもの自立に伴う寂しさを軽減する上で重要な意味を持っていることが推察された。

また、父親の関わり尺度の「子どもとの直接的交流」と母親感情尺度の「子どもの成長への寂しさ」との間に弱い負の相関が見られた($r = -.253$, $p < .01$)。一般に、父親より母親の方が子どもとの交流が活発であると言われることから考えると(山田, 1988)、父親の子どもとの交流が活発であるということは、母親の子どもとの交流も活発である可能性が高い。またそれと同時に母親にとっては、父親が子どもと積極的に直接的交流をもってくれている、あるいはこれまでそうであったという認知が母

親の寂しさや孤独感を少なくするということが言えるだろう。

総合考察

本研究のまとめ

本研究における調査の結果と考察を以下にまとめた。

目的①：父親の関わり尺度のうち「家族との情緒的交流」が、自立受容度得点と関連を持っており、子どもの自立に対してより受容的な母親ほど、父親の家族との情緒的関わりを高く認知していた。

以上の結果より、母親が子どもの自立を受容していくためには、父親が家族に対して、より積極的な情緒的関わりを持つことが重要であるということが示唆された。母親が、父親との情緒的な関わりに満足し、かつ父親が母親ばかりでなく子どもを含む家族全体に対して、暖かく見守ったり相談にのったりするなどの情緒的サポートを行うことで、母親は子どもの自立に対して受容的になることができるといえるだろう。青年期の子どもを持つ母親にとっての課題は、子どもの自立の受容と夫婦関係の再構築であるといわれる。この調査により得られた結果は、母親の中でこれら2つの課題が、相互に関連しあいながら、親子関係・夫婦関係の再構築に向けて乗り越えられていくものであるということを示していたのではないだろうか。

目的②：子どもの自立に受容的な母親ほど、子どもの成長を信頼している傾向が強く、子どもの自立に受容的でない母親ほど、子どもの成長に対して寂しさを感じている傾向が強かった。

以上の結果から、子どもの自立の受容においては、子どもの成長を信頼することが重要な要素であることが示唆された。母親は子どもの成長を信じることにより、これまでとは違い一歩ひいたところから見守る姿勢を持つことができるようになるといえるだろう。

目的③：父親の関わり尺度の「家族との情緒的交流」と母親感情尺度の「個人役割への自己投入」との間に正の相関があり、また父親の関わり尺度の全ての下位尺度において、母親感情尺度の「子どもの成長への寂しさ」との間に負の相関が見られた。

以上の結果から、父親の家族との情緒的関わりが子どもの成長に対する母親の寂しさや孤独感を少なくし得ること、さらには、父親の情緒的なサポートの存在により、母親が自分自身とも向き合うことができるようになることが分かった。父親の関わりは、子どもの自立の受容に限らず、いわば母親の精神的健康全体にも影響しているといえるのではないだろうか。

本研究から得られた結果を通して述べられることは、青年期の子どもを持つ母親にとって、父親の存在が極めて重要であるということである。特に、父親が家族との

間に活発な情緒的関わりを持つことにより、母親は夫婦関係に満足し、かつ子どもの自立に寂しさを感じることも少なくその状況をスムーズに受容していくことができるといふ示唆が得られた。日本における家族の特徴として、「母子間の結びつきの強さ」と「父親不在」という図式が指摘されることが多い。父親が家庭外での仕事の忙しさのために、育児など家庭での様々な事柄を母親に任せきりになったり、母親・子どもと十分なコミュニケーションを取ることができなかつたりという状況が母子間の結びつきを強め、そのことがゆくゆくは子どもが青年期に達したときの「子離れ・親離れ」の難しさをもたらすことになり得るかもしれない。逆に、本研究の結果は、父親の存在、すなわち父親が家族に対して情緒的な関わりやコミュニケーションを積極的に持つことが母子間の過度な結びつきを防ぎ、家族の安定化をもたらす得るといふことを示唆しているであろう。子どもの自立の受容、そしてもちろん夫婦関係の見直しという課題は、母親ばかりでなく父親にとっても大きな課題なのであり、それらは夫婦が共に協力し合って取り組んでいくべき課題だといえるのではないだろうか。

今後の課題

1. 尺度の作成に関して

今回は予備調査と先行研究を参考に3種類の尺度を作成したが、いずれの尺度においても、母親による自立の受容、及び父親の家族への関わりのある方を全体的に捉えようとしすぎたために、かえって漠然とした内容の尺度になってしまった。それは目的③の検討において、各尺度の項目内容が類似しているがために低い相関係数が算出されたことから判断される。今後、質問項目の検討を重ね、より精緻化していく必要があると考えられる。

2. 「自立」あるいは「自立の受容」の捉え方

本研究では、質問紙調査を通じて母親による子どもの自立の受容のあり方を捉えることを目指した。しかしながら、本研究を進めていく中で、子どもの自立についての捉え方が多様であることが感じられた。今回は、「自立」あるいは「自立の受容」をほんの一側面から取り上げたに過ぎない。また、どのような過程を経て、子どもの自立と母親による子どもの自立の受容が進んでいくのかという点についても、質問紙調査では十分に明らかにすることができなかった。おそらくそれらは、日常の親子関係・家族関係の中で様々な様相を見せながら徐々に、少しずつ進んでいくものであり、自立できているか否か、自立を受容できているか否かという一義的な視点ではこの問題を捉えきることはできないのではないだろうか。従って、今後はより丁寧な個別の面接調査も行う

ていくことが必要ではないかと思われる。

3. 父親本人を対象とした研究の必要性

今回の研究では、母親による子どもの自立の受容における父親の存在の重要性が明らかになった。しかしながら、父親自身は実際に母親（妻）と子どもに対してどのような関わりを心掛け、子どもの自立や夫婦関係をどのように捉えているのだろうか。今回の母親を対象とした研究を踏まえた上で、次は父親を対象とした研究を行うことにより、母親側の認知と父親側の認知とを比較検討することができるだろう。そして、このような研究を行うことにより、自立期を迎えた子どもを持つ夫婦が家庭内で抱いている様々な葛藤に対するより良いアプローチにつながると共に、より豊かな老年期に向けてのより良い夫婦関係を模索していくための示唆が得られるのではないだろうか。

付 記

本論文は筆者が九州大学教育学部に提出した卒業論文（平成12年度）を加筆修正したものである。本論文作成にあたり、ご校閲賜りました九州大学大学院人間環境学研究院北山修教授と、研究の過程で数多くの貴重なご助言をいただきました九州大学大学院吉岡久美子さん、浅海健一郎さんに深謝いたします。

引用文献

- 岡本祐子 1994 8章 人生の正午—中年期— 岡本祐子・松下美知子（編）女性のためのライフサイクル心理学 福村出版 177-200
- 笹田明子 1996 中年期女性の性役割 教育と医学, **44** (10), 73-78
- 鈴木英子 1998 大学生をもつ母親の「子離れ」についての一研究 日本女子大学人間社会研究科紀要, **5**, 91-104
- 無藤 隆・久保ゆかり・遠藤利彦 1995 現代心理学入門2 発達心理学 岩波書店
- 友清由希子 1996 母親による子どもの自立の受容と愛着の様相との関連 平成8年度九州大学大学院教育学研究科修士論文
- 友清由希子 1994 母親による子どもの独立の受容に関する一考察—青年期の子どもを持つ母親の場合— 平成6年度九州大学教育学部卒業論文
- 岡堂哲雄編 1988 講座 家族心理学6 家族心理学の理論と実際 金子書房
- 柏木恵子編著 1998 結婚・家族の心理学—家族の発達・個人の発達— ミネルヴァ書房
- 尾形和男・宮下一博 1999 父親の協力的関わりと母親のストレス、子どもの社会性発達および父親の成長 家族心理学研究, **13-2**, 87-102
- 永田忠夫 1999 良好な夫婦システムに影響を及ぼすコミュニケーション行動 愛知淑徳短期大学研究紀要, **38**, 1-21
- 谷井淳一・上地安昭 1993 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, **26**(2), 17-25
- 山田順子 1988 青年期の母子関係 心理学評論, **31** (1), 88-100
- 柏木恵子・高橋恵子編著 1995 発達心理学とフェミニズム ミネルヴァ書房
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- 沼山 博 2000 成人期研究の動向と展望 教育心理学年報, **39**, 61-69